

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成 29 年 8 月 5 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年 研究員

氏 名 松 岡 佐 知

助成の種類	平成29年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	第10回国際アジア研究者会議 The Tenth International Convention of Asia Scholars(ICAS10)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )		
発表題目	Medical Pluralism for Southern Indian Communities: From the Perspective of Contemporary Non-codified Medicine		
開催場所	タイ王国・チェンマイ県・Chiang Mai International Exhibition and Convention Center		
渡航期間	平成29年7月19日 ～ 平成29年7月29日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	150,000円	
	使用した助成金額	150,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券(大阪ーチェンマイ)	70,000円
		宿泊費	46,000円
学会参加費		34,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 採択の連絡を頂いてから、助成金の入金まで迅速に対応して頂き、とても感謝しております。また、本助成金申請後に参加研究者有志で関係施設の視察をすることになり、帰国日を変更することにも柔軟に受け入れてくださり、とても貴重な時間を現地で持つことができました。ありがとうございました。		

## 成果の概要/松岡佐知

### 1. 国際学会について

タイ北部のチェンマイで開催された国際アジア研究者会議(以下 ICAS)に参加した。ICAS は、アジアの社会や文化、環境等にかかる横分野/学際的なアジア研究において、最も大きな学会である。過去9回の合計参加者数は延べ9万人であり、毎回1,000人以上の参加が見込まれており、第10回目の今回も、世界中から1,050人ほどの研究者や国際機関やNGOの実務者が集まった。2001年からオランダのライデン大学に本部を置くThe International Institute for Asian Studies (IIAS)がこの会議の運営に中心的な役割を果たしており、アジア地域研究者による多彩な研究発表の場を持つ事でアジア研究の発展に寄与することを目指している。

近年、発生している社会・環境問題は複雑で多種多様な要因が関わっており、応用研究として、従来の研究分野だけでは対処することが出来ない。多様な分野の研究者が一同に会することで、実際社会の問題解決に貢献しうる学際的なアジア研究のあり方や包括的な視点の持ち方を議論することができる。このような横分野的な学会の存在は非常に貴重である。

### 2. 発表の概要

「Health」というテーマで、Griffith Law Futures Centre, Australia の Nirekha De Silva 氏、National Museum of Natural History, France の Vanessa Choloiz 氏との3人からなる1時間半のセッションに参加し、その中でトップバッターとして発表を行った。発表の内容は今年3月に受理された博士論文の内容であり、そのうち、現代の公的資格を有しない伝統的治療師のありよう、特に伝統的治療師と医療制度下にある伝統医療との関係性について、新規性が高く、非常にユニークな視点であると評価を頂くことができた。スリランカ研究者、北インド研究者とそれぞれの地域における「近代化」の文脈の違いや適切な研究手法について、議論することができた。

発表した研究は、公衆衛生や国際保健の分野で研究されてきた地域医療を地域の文化や歴史、宗教観や生態環境から生じる人々の生命観までも包含した視点で描出したものであり、報告者の博士研究の主題であった。特異な医療多元性の高さを示す南インドにおいて、伝統的治療師の役割やその医療制度との相互関係性の変遷の考察を通して、地域医療を医学ではなく生態環境や文化と紐づいた地域というフレームで明らかにした。民俗学や人類学などで伝統知や治療実践が明らかにされてきた伝統的治療師だが、公的医療、特に性質が近似する医療制度下におかれる伝統医療との相互関係性については明らかにされてこなかった。そして、伝統的治療師は、医療制度外におかれ政府機関からは、医療としてほぼ認知されておらず、既存研究では、近代化に伴

い伝統治療師の役割は衰退していることが強調されてきた。これに対し、報告者の南インドにおける研究で都市部住民が農村を訪れ伝統的治療師を利用していることを明らかにしてきた。日本ではほぼ姿を消した伝統的治療師が、インドにおいては、どのように制度的医療と相互関係性を持ち得るに至り、社会文化や疾病構造の変遷の中でその存在を支えてきたのかを複数の伝統的治療師の事例や長期フィールドワークに基づく治療選択行動についての質的量的な調査に基づき考察した点が評価された。

このセッションで、報告者が議論を行いたかった「医療制度の枠の外にあるが、医療の機能を果たしているものは生態環境と紐づいた文化や慣習、伝統芸能などの中にもあり、それを生かすことはできないか。制度外だから持ち得るその機能にも視点をあてることで、それぞれの人が望む生や死のありかたに近接することができ、先進国においても課題解決の一助となる可能性があるのではないか。」という点についても、多方面の専門家と意見を交わす事が出来た。特に **National Centre for Scientific Research(CNRS)**のシニア・リサーチャーの **Laurent Pordie** 博士からは北インド・ラダックやカンボジアでの事例を紹介頂き、それぞれの文化的背景にそぐう医療の在り方について深い議論ができた。この博士とは、学会後日に現地で再度、会うことができ、本研究や報告者の今後の研究の方向性について、チュートリアルをして頂ける機会に恵まれた。今まで、南アジア地域を専門とする医療人類学者をスーパーバイザーに持っていなかった報告者にとっては、視野を広げ、新たな着眼点を得ることができる経験であった。今後につながる大きなステップとなったといえる。

### 3. 謝辞

博士号を取得した直後での学会参加、そこでの有能な研究者たちとの議論や意見交換は、今後の研究者人生にとっても、想定した以上に非常に重要でありました。これをサポートして頂いた公益財団法人京都大学教育研究振興財団に深く感謝いたします。